国際交流基金日本語教育紀要
第10号（2014年）

〔実践報告〕

JF 日本語教育スタンダード準拠コースブックを使用した教師研修

ー『まるごと　日本のことばと文化』（入門　Ａ１　かつどう）教師研修の実践ー

早川直子・カルメンシータ・ビスカラ・中込達哉

〔キーワード〕JF 日本語教育スタンダード、教師研修、気づき、自己変容

〔要　旨〕

本稿はマニラ日本文化センターで実施された『まるごと　日本のことばと文化』（入門　Ａ１　かつどう）を使用した教師養成について述べる。2012年４月、センターでは新規講座である「まるごとＡ１コース」が開講された。開講してすぐに、次に開講するのは継続コースのＡ２コースか、より多くの新規学習者を開拓するＡ１コースかという選択に迫られた。「JF 日本語講座講師訪日研修」に参加したわずか２名の講師体制では両コースを同時に開講することはできず、センター内で新たに「まるごとＡ１コース」の担当講師を養成することにした。本稿では「まるごと教師研修」が始まった経緯と研修の内容、さらに文型導入から基本練習という流れの授業になじんでいた実習生たちが「まるごと教師研修」を通してどのような気づきや自己変容への認識を得たかを報告する。

１．はじめに

国際交流基金マニラ日本文化センター（以下、JF マニラ）では2012年４月より『まるごと　日本のことばと文化』（入門　Ａ１　かつどう）[(1)]（以下、『まるごと』）を使用した日本語会話コース、「まるごとＡ１コース」が始まった。試験合格や就職を目的とした日本語学習者ではなく、アニメやマンガのファン、日本食愛好家、日本人の配偶者などが楽しみながら気軽に日本語に触れるコースとして順調に走り始めた。

2011年と2013年に「JF 日本語講座講師訪日研修」に参加した２名のフィリピン人講師（以下、まるごと講師）は2011年の帰国後も JF マニラの日本語教育アドバイザー（以下、JF アドバイザー）のもとで半年の研修を受け、翌４月から「まるごとＡ１コース」を担当した。この JF マニラでの研修では自分が担当する課の教案作成、JF アドバイザーとのディスカッション、教案修正、模擬授業をくりかえし行った。そして４月のコースが始まってまもなく学習者からＡ２コースに進みたいという要望があがった。

しかしながら「まるごと講師」は他にも所属先があり、わずか２名の講師体制では『まるごと』講座は１コースの開講が限界であった。そのため継続コースであるＡ２コースを開設する

か、あるいは新たな学習者掘り起しのためにもう一度Ａ１コースを開講するか、どちらか一方を選択せざるを得なかった。結局Ａ１修了者を増やすことを優先するという理由で後者を選んだ。こうした教師不足の背景を踏まえ、『まるごと』のコンセプトに沿った授業ができる「まるごと講師」をJFマニラ内部で養成する「まるごと教師研修」が始まった。本稿は10か月に渡った第１期研修と第２期研修について報告する。

２．「まるごと教師研修」の内容

2.1　研修期間

「まるごと教師研修」は「まるごとＡ１コース」の授業見学を兼ねるため、下図のようにコース開講期間を前後に拡張したスケジュールで行った。コース開講前には教師研修のオリエンテーション、コース中盤から終了後しばらくは模擬授業などを実施した。

図１の通り、第１期研修は2012年９月から2013年５月までの間、「まるごとＡ１コース」の速習コースと土曜コースのスケジュールに合わせて実施した。JFマニラの「まるごとＡ１コース」は第１課から第10課までを学ぶ「モジュール１」、第11課から18課までを学ぶ「モジュール２」（各24時間）に分かれている。速習コースは大学の学期休みである10月に合わせ、一日２時間、２週間で「まるごとＡ１コース」の１課から10課までを学ぶ短期コース、一方の土曜日コースは土曜日の午前中２時間、７か月弱かけて１課から18課まで学ぶ長期コースである。研修当初は数名の確保を見込んでいたが、実習生たちは課題をこなせず途中であきらめたり新しい仕事に就くなどして離脱していった。

実習生補充の目的で始まった第２期研修は、「まるごとＡ１コース」の火・木コース合わせて実施した。このコースと研修のスケジュール例は稿末の資料１に記した。「火・木コース」は４月から６月までのコースで、一日２時間、週２回でモジュール１と２を学ぶ。コース開講直前の３月に研修のオリエンテーションを、コース後半からコース終了後７月にかけては模擬授業とふりかえりを行った。第１期、第２期を合わせ、「まるごと教師研修」は10か月にも及んだ。

図１「まるごとＡ１コース」と「まるごと教師研修」スケジュール

<table>
<tr><td>年／月</td><td>12／4</td><td>5</td><td>6</td><td>7</td><td>8</td><td>9</td><td>10</td><td>11</td><td>12</td><td>13／1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td><td>7</td></tr>
<tr><td rowspan="2">教師研修</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td colspan="7">第1期研修</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td colspan="5">第2期研修</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="16"></td></tr>
<tr><td rowspan="2">A1 コース</td><td colspan="2">モジュール 1
L.1-10</td><td colspan="2">モジュール 2
L.11-18</td><td></td><td></td><td>速習
モジュール1
L.1-10</td><td colspan="3">土曜コース
モジュール 1
L.1-10</td><td colspan="3">土曜コース
モジュール 2
L.11-18</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td colspan="2">火・木コース
モジュール 1
L.1-10</td><td colspan="2">火・木コース
モジュール 2
L.11-18</td><td></td></tr>
</table>

2.2　実習生

第１期実習生の選抜は研修担当者であるJFアドバイザー２名と「まるごと講師」１名が行った。公募はせず、これまでJFマニラの教師研修やセミナー、フォーラムに参加した約170名の教師リストの中から選んだ。選考基準は現役の日本語教師であること、日本語能力試験Ｎ２程度以上の日本語レベルであること、協調性があることで、第１期研修は８名（表１の１Ａ～１Ｈ）が登録した。しかし実習生は仕事や学業で忙しく、最後の模擬授業まで残ったのは３名（１Ａ、１Ｃ、１Ｈ）であった。

第２期研修は『まるごと』を教えたいという希望者７名（２Ｉ～２Ｏ）でスタートした。経験豊富で日本語能力の高い、即戦力として期待できる実習生が多く、研修担当者は連絡をこまめに取りサポートに力を入れた。

表１　実習生一覧

実習生＊	性別	年代	日本語教授歴
１Ａ	F	20代	７年
１Ｂ	F	50代	４年
１Ｃ	F	20代	０年
１Ｄ	F	40代	６年
１Ｅ	F	20代	１年
１Ｆ	F	20代	３か月
１Ｇ	M	20代	９か月
１Ｈ	F	30代	０年
２Ｉ	F	60代	20年
２Ｊ	F	30代	６年
２Ｋ	F	30代	14年
２Ｌ	F	30代	５年
２Ｍ	F	40代	1.5年
２Ｎ	F	20代	４か月
２Ｏ	F	20代	４か月

＊先頭の番号は期

2.3　研修の流れ

全ての実習生にとって『まるごと』は初めて見る教材であった。しかもJFマニラの「まるごとＡ１コース」はコミュニケーション言語活動を中心に学ぶクラスのため、文法を教え、文型練習に慣れている教師には授業がイメージしにくいと想定された。そこで教材のコンセプトを理解し、授業をイメージしてもらう一番いい方法は実際の授業を見学することではないかと考えた。実習生は「まるごとＡ１コース」の授業見学を通して、『まるごと』のコンセプトや授業の流れを理解し、自分の授業のための教案を作ることを目指していく。

次の図２に第２期研修の流れを示した。まず研修のスケジュールとテキストを見て見学希望日を決め、次に見学前の教案作成と提出、授業見学、見学後のディスカッション、教案再提出の工程をくりかえした後、仕上げの模擬授業と研修のふりかえりを行った。

図２　第２期研修の流れ（2013年３月～７月）

まるごと A1 コース スケジュール	第 2 期研修の流れ	実習生の活動	研修担当者の支援
３月 コース前	(1)ガイダンス	同意書[2]へのサイン	JF日本語教育スタンダード[3]、『まるごと』教材、「まるごとA1コース」内容の紹介／テキストの貸出
４月～６月 まるごと A1コース 開講	**(2)教案提出**	授業見学日の１週間前提出締切 →	教案チェック
	(3)授業見学	モジュール1では4回（2トピック4課分）、モジュール2では2回（1トピック2課分）、全6回	
	(4)ディスカッション	教案と見学した授業の流れの違い、新たな気づきをコメント → ←	教案再提出へ向け改善・修正ポイントをコメント
	(5)教案再提出	ディスカッションの１週間後提出締切 →	教案チェック
７月 コース後	(6)模擬授業	一人1～2課分 ←	評価シートへコメント
	(7)ふりかえり	感想シートへ記入後、提出	

３．研修のプロセスと内容

3.1　ガイダンスから授業見学前の教案作成まで

ガイダンスではJF日本語教育スタンダードとＡ１からＣ２までの６つのレベル[4]、そして『まるごと』のコンセプト、研修のスケジュールが説明された。実習生たちは新しいテキストに興味を示し教えることへの期待を高める一方で、今までの「説明する授業」とは別の「気づかせる授業」を実践することに対して不安を見せた。「まるごとＡ１コース」はコミュニケーション言語活動を中心に学ぶクラスである。音声、イラスト、写真を用いたインプットから、会話の流れやよく使われる表現に気づかせ、口頭練習ののちタスクを通して実際に使えるようにしていく流れで行われる。これまで文型導入や文型練習が中心の授業に慣れていた教師たちにとって新しいタイプの授業だった。

授業見学の条件は見学の１週間前までに見学を希望する課の教案を提出することであったが、教案を作った経験がない実習生もいたため、ガイダンス時にサンプル教案を配布して教案に入れる必要最低限の項目を確認した。提出された教案は日本語で書かれたもの、英語で書かれたもの、１ページに収まっているもの、20ページ近くにわたって詳細を記述したもの、パワーポイントを付けたものと形式は様々であったが、ことばや表現を丁寧にわかりやすく説明することに重点を置いたものが多く、コースの「場面を理解し、その場でシンプルな交流ができる内容を気軽に学ぶ」というねらいとは異なっていた。

3.2　授業見学、ディスカッションでの気づき

授業見学は「まるごとＡ１コース」開講期間中の希望日に行われた。学習者に配慮し、一度に教室に入る実習生の数を制限して見学スケジュールを組んだ。見学中、実習生は自分の教案を手元に置き実際の授業の流れと比較しチェックを入れた。

見学後のディスカッションは同じ課の教案を作成した実習生を集めて実施し、自分の教案に入れたチェックを参考に各自が気づいたことを述べていった。そこでは「『まるごと』の授業の流れは私の教案と全然違った」、「私が説明したかった部分を、教師は教えるのではなく学習者から引き出していた」といった気づきが目立った。それぞれが気づいた点や反省点について述べた後で、研修担当者が教案のよかった部分をフィードバックし、各実習生が得た気づきを全体で再度確認した。一度に伝えきれないほどのアドバイスがあったものの、教案の再提出時に生かしてもらうため、コメントの数や内容をコントロールし、ポイントを最小限にしぼって伝える努力をした。この見学やディスカッションの過程で、実習生たちは他者の気づきからも学ぶ機会を得ることができた。そして、その気づきは次第に教案に反映されていった。

3.3　模擬授業と評価

教案提出、授業見学、教案再提出を終えた実習生は実際の授業と同じ教室で模擬授業を行った。すでにこの段階では、「インプットからアウトプットへ」、「教えないで気づかせる」、「気軽で楽しい学習」というコースのコンセプトを理解しており、あとはそれを実践の場でどれだけ実現できるかが課題となっていた。タイムマネジメントなどの課題は残ったものの、実習生は研修の仕上げにふさわしい授業をした。第１期研修の模擬授業では学生役を研修担当者が演じたが、第２期研修では「まるごとＡ１コース」に在籍した学習者を学生役にして生の教室に近い環境を設定した。

評価に関しては第２期のモジュール２の研修開始時に研修担当者がファシリテーターとなり、「いい教師とは？」というテーマでディスカッションを行った。ブレインストーミングにマンダラート[5]を活用し、実習生自身のことばで理想の授業像、よい授業像、教師像とは何かを図３にある８つのキーワードでまとめた。このキーワードは研修の共通目標として設定され、模擬授業の評価基準やふりかえりのポイントとなった。終わりに示し

図３　「いい教師とは？」実習生へのコメントシート

2013 年まるごと教師研修

名前（　　）第（　）課

楽しい	わかりやすい	エネルギー
役立つ日本語	理想の授業 よい授業	知っている日本語 が使えるように
満足	コミュニケーション	学生中心

た資料２のようにそれぞれのマスに見学した実習生からのコメントが書き込まれ、模擬授業の最後に実習生本人に渡された。

3.4　感想シートによる気づき

研修の最後に、実習生は研修全体への感想、授業見学や教案作成、模擬授業などの各段階で感じたことなどをシートに記入した。資料３として稿末に例示したように、これまでの自分の授業と『まるごと』の授業の違いを明確にしたものが多かった。以下のコメントにみられた「説明せずに学習者に気づかせることを学んだ」という気づき（下線部）が、この「まるごと教師研修」が自身のビリーフスに影響をもたらし、結果的に自己変容を促すきっかけとなった証左であろう。

> 今まで文法説明の際は英訳をすぐ言ってしまっていたが、「まるごと」は学習者に気が付かせるスタイル。学習者は、自分で発見すると嬉しいし、忘れないと思う。（中略）Can–Do が明確なので、教師、学習者ともに振り返りがしやすい。（２M、下線筆者）

> 教師の役割は、学習の過程をファシリテートすることであり、（中略）語彙や文型を列挙することでは学習者は磨かれていかない。学習者はコミュニケーションのため、相互理解のため、相手に自分の考えを説明するための機会を与えることで磨かれていく。（１A、原文は英語、下線筆者）

> これまでの私の教え方は、多くのフィリピンでのクラスのように、教師が学習者にすべての情報を与えることに重点を置いてきたが、これは効果的ではないと気づいた。学習とは双方向性のもので、よい授業では教師と学習者がお互いから学び合えるものだ。（１C、原文は英語、下線筆者）

加えて「まるごとＡ１コース」の授業の特性への気づきとして、以下のように『まるごと』の学習者がかなり話せるようになったことを指摘したコメントがあった。

> 学習者に考えさせる、気づかせることを大切にしていると感じた。また、教科書に出てくる表現を全てわからせようと思っていたが、数や日にちの数え方など、全てその課でマスターしなくても、聞いてわかれば良いレベルに目標を定めれば、プレッシャーもなく学べる。（中略）状況の絵や写真を見せれば、自然と会話が出てくるような学習の流れになっている。文法積み上げ式の教科書を使用する場合と比較すると、同じ学習時間数では、かなり話せるようになると感じた。（２M）

外国語を教えるとき、学習者がコースの最後に実際の場面で習ったことが使えるようになっていればいいと思う。日本語での「読むこと」「書くこと」は大切であるが、入門期の学習者には、実生活で使うことができる「話すこと」「聞くこと」により力を入れるべきであると思う。（１Ｃ、原文は英語）

授業を見学しただけではなく、自分自身も模擬授業を通じて学習者から言いたいことを引き出し、その成果を体感したからこそ得られた気づきではないかと考える。

その一方で、文法積み上げ式の授業に慣れていた実習生は「授業の進め方は理解できたか」という質問に対して以下のように述べた。

この「まるごと」コースは実用的な言語使用を目的とした授業である。それは文法を教えることを目的とした授業よりもかなり複雑である。コンセプトは理解できたが、120分で４ページを効果的／効率的に教える方法がまだ少しわからない。

（２Ｎ、原文は英語）

コースの特性を頭では理解しているものの実行することが難しいという葛藤が表れている。この実習生は経験が浅く、ふりかえり時は文法積み上げ式の教授法で丁寧に説明する授業にようやく慣れたころだった。当時は『まるごと』の教え方に不安を見せていたが、現在では問題なく授業を担当している。

また特に模擬授業で顕著であったのはタイムマネジメントの問題であった。時間通りに授業を進行し、終了できる実習生が非常に少なかった。研修担当者からは教案の内容に優先順位をつけ、削除してもいい部分にマークをしたり、時間があるときに紹介できるような文化的なトリビアやエピソードを入れておくなど、時間調整が可能な教案にすることを提案した。

４．まとめ（成果）と今後の課題

「まるごと教師研修」には延べ15名が参加した。次ページの表２の通り、モジュール１まで修了した実習生は３名、モジュール２まで修了した実習生は６名であった。課題をこなせずあきらめてしまった実習生もいた一方で、参加した多くの実習生が3.4でみられた自己変容への認識へとつながるような気づきを得られた。これらの気づきは自身で得たものに加え、他者を通して得たものもあったに違いない。研修の過程で仲間の成長をじかに見ることは自身を磨く動因となったであろうし、他の実習生の存在を通して自身を振り返ることで、教師としての成長をより強く実感することができたのではないかと思われる。

表２　実習生別課題修了一覧

実習生	モジュール１ 見学前教案	モジュール１ 見学後教案	モジュール１ 模擬授業	モジュール２ 見学前教案	モジュール２ 見学後教案	モジュール２ 模擬授業	修了 モジュール
１Ａ	✓	✓	✓				1
１Ｂ	✓	✓					
１Ｃ	✓	✓	✓				1
１Ｄ	✓	✓					
１Ｅ							
１Ｆ							
１Ｇ							
１Ｈ	✓	✓	✓	✓	✓	✓	１＆２
２Ｉ	✓			✓			
２Ｊ	✓	✓	✓	✓	✓	✓	１＆２
２Ｋ	✓	✓	✓	✓	✓	✓	１＆２
２Ｌ	✓	✓	✓	✓	✓	✓	１＆２
２Ｍ	✓	✓	✓	✓	✓	✓	１＆２
２Ｎ	✓	✓	✓	✓	✓	✓	１＆２
２Ｏ	✓	✓	✓	✓	✓		1

この気づきを促した一因として、「まるごとＡ１コース」が文型導入や文型練習中心ではなくコミュニケーション言語活動中心という実習生たちにとって未体験の授業だったことが大きい。経験豊富な実習生でさえも、会話のモデルとしての自身の発音に注意したり話題を広げるための情報収集をするなど、授業の準備に余念がなかった。

研修担当者である筆者らが心がけたことは、まず「実習生に楽しい授業を見てもらい、楽しくするための仕掛けに気づいてもらう」こと、次に「実際の授業の流れと自分の教案の違いに気づき、教案をどう改善するか考えてもらう」こと、そして「早く『まるごと』を教えたいという気持ちで模擬授業をしてもらう」こと、この過程がスムーズに運ぶよう、実習生のその時の状態に合ったアドバイスをすることだった。

研修を終えた実習生たちは2013年９月からの「まるごとＡ１コース」、そのほか単発講座を担当する。実習生のうち２名はJFマニラと共同で「まるごとＡ１コース」を実施している日本語センター財団に所属しており、今後はそこでの『まるごと』コースを担当する。またJFマニラの「まるごとＡ１コース」は「かつどう」のみの使用であることから、ローマ字表記がなくなるＡ２コースへ進級するためには文字学習の必要が出てくる。JFマニラにはＡ１コースからＡ２コースへの橋渡しのコースとして文字とＡ１の語彙を学ぶ「まるごと文字コース」（全10回）があり、次回の開講からは実習生に授業を任せる予定である。

今後の課題はコースが増えるにつれ「まるごと教師研修」に時間がかけられなくなることである。いかに短時間で実習生に『まるごと』のコンセプトを理解させ、授業の流れのポイントをつかませるかといった工夫が必要になる。研修で一番時間がかかるのは教案指導の部分で、この部分の質を落とさずに簡略化するために実習生に提示するサンプル教案の内容を充実させることが喫緊の課題である。初めて『まるごと』を手に取る教師でも戸惑うことなく教え方のポイントをつかみ、自由にアレンジしながら使っていけるようなサンプル教案を提供したいと考えている。

今回の研修は「まるごと教師研修」という『まるごと』コース限定の教師養成であったが、そこで得られた気づきは必ずしもテキストが『まるごと』でなくても応用できるはずである。場面を提示し、大量のインプットからシンプルな表現に気づかせ、それを使ってコミュニケーションするという流れはほかのテキストを使用した授業でも実践できる。市販化で拡充するであろう『まるごと』講座の担い手として、「まるごと教師研修」の実習生たちが大きくはばたいて波及効果を生み出してくれると信じたい。

〔注〕

(1)海外の日本語学習者（一般成人）を対象とした教材。本実践では試用版を使用した。Ａ１レベルは入門レベルをさす。試用版は「活動編」、「理解編」に加え「語彙帳」からなっているが、本実践では「活動編」と「語彙帳」のみ使用した。「活動編」は、コミュニケーション言語活動を中心に学ぶ教材で、日本語を実際に聞いたり話したりしながら、日本語でコミュニケーションができるようになることを目的とした教材である。

(2)「まるごと教師研修」に参加できなくなった場合、貸し出した教材一式を返還するよう求める同意書。

(3)国際交流基金の理念「国際交流」「相互理解」を受けて、欧州の CEFR（Common European Framework of Reference for Language : Learning,teaching,assessment）を参考にして作られた日本語教育の教授、学習、評価のツール。

(4)JF スタンダードでは６段階（Ａ１～Ｃ２）で言語熟達度を示す。「A：基礎段階の言語使用者」、「B：自立した言語使用者」、「C：熟達した言語使用者」の３つの段階が、さらに２つに分かれる。

(5)９マスの正方形で発想を促すアイデア思考法。中央のマスに考える１つのことを書きその周囲に考えつく８つの関連要素を書き込んでいくもの。

〔参考文献／参考サイト〕

来嶋洋美・八田直美・柴原智代（2012)「『まるごと　日本のことばと文化』－その理念と概要－」第17回海外日本語教育研究会、国際交流基金日本語国際センター　配布資料

来嶋　洋美、柴原　智代、八田　直美（2012)「JF 日本語教育スタンダード準拠コースブックの開発」『国際交流基金日本語教育紀要』第８号、103-117

国際交流基金「JF 日本語教育スタンダード」サイト
<http : //jfstandard.jp/top/ja/render.do> 2013年７月28日参照

国際交流基金（2011)『まるごと　日本のことばと文化』試用版（入門 Ａ１ 活動編、理解編、語彙帳)、

独立行政法人国際交流基金
春原憲一郎・横溝紳一郎（2006）『日本語教師の成長と自己研修－新たな教師研修ストラテジーの可能性をめざして』、凡人社
藤森弘子（2005）「プロセス重視型の日本語教育実習の試み－実習生の気づきレポートの分析から－」『東京外国語大学論集』第71号、249-262

〔資料１〕まるごとＡ１コース（モジュール１）と第２期研修スケジュール

まるごとＡ１コース（モジュール１）と第２期研修スケジュール

○はミーティング実施日　◎は教案提出日

日程	時間	内容	
4 月 4 日（木）	6:30－8:30（授業）	オリエンテーション ﾄﾋﾟｯｸ 1　L.1 こんにちは	○*◎
4 月 11 日（木）	5:00－6:00（研修）L1		
	6:30－8:30（授業）	ﾄﾋﾟｯｸ 1　L.2 もういちど　おねがいします	◎
4 月 16 日（火）	5:00－6:00（研修）L2		
	6:30－8:30（授業）	ﾄﾋﾟｯｸ 2　L.3 どうぞ　よろしく	◎
4 月 18 日（木）	5:00－6:00（研修）L3		
	6:30－8:30（授業）	ﾄﾋﾟｯｸ 2　L.4 かぞくは　３にんです	◎
4 月 23 日（火）	5:00－6:00（研修）L4		
	6:30－8:30（授業）	ﾄﾋﾟｯｸ 3　L.5 なにが すきですか	◎
4 月 25 日（木）	5:00－6:00（研修）L5		
	6:30－8:30（授業）	ﾄﾋﾟｯｸ 3　L.6 どこで　たべますか	◎
4 月 30 日（火）	5:00－6:00（研修）L6		
	6:30－8:30（授業）	ﾄﾋﾟｯｸ 4　L.7 へやが３つ　あります	◎
5 月 2 日（木）	5:00－6:00（研修）L7		
	6:30－8:30（授業）	ﾄﾋﾟｯｸ 4　L.8 いい　へやですね	◎
5 月 7 日（火）	5:00－6:00（研修）L8		
	6:30－8:30（授業）	ﾄﾋﾟｯｸ 5　L.9 なんじに　おきますか	◎
5 月 9 日（木）	5:00－6:00（研修）L9		
	6:30－8:30（授業）	ﾄﾋﾟｯｸ 5　L.10 いつが　いいですか	◎
5 月 14 日（火）	5:00－6:00（研修）L10		
	6:30－8:30（授業）	review & reflection	
5 月 16 日（木）	6:30－8:30（授業）	test & enquete	○**

*4 月 4 日

オリエンテーションがあり、初日の授業の様子もわかるため、できれば実習生に参加してほしい日。

**5 月 16 日

研修日ではないが、学習者の感想が聞けるので、できれば実習生に参加してほしい日。

５つのトピックの中から 2 つ選んで参加する。例：L.1 & 2（ﾄﾋﾟｯｸ 1）と L.7 & 8（ﾄﾋﾟｯｸ 4）

見学日の 1 週間前までに教案を提出する。提出がなければ参加不可。

（授業）：「まるごとＡ１コース」の授業　（研修）：教案についてのディスカッション

〔資料２〕研修実習生から他実習生への模擬授業の評価（「いい教師とは？」８つのポイントから）

先生の技術はいいと思いますが（例は答えから質問を聞くとか、たくさんの練習とか）、じじをあげる時ちょっと自信がないを見えるので、学生も自信がなくなると思う。

2013年まるごと教師研修

名前（ [redacted] ）　第（16）課

楽しい ✓ もっとsmile ^^ 導入はいいと思いましたが、ちょっとintensive日本語みたいな感じがする。	わかりやすい △ 1、a？～まい？学生に何が言わもるのは時々わかりにくいと思う。	エネルギー △ 学生にeye contactしないと、学生が本当に
役に立つ日本語 ✓ リアルライフで使う日本語はたくさんあるから問題ないと思う。	理想の授業 よい授業 ^^	知っている日本語が使えるように ✓ ねだんも言わせて、すこし練習になると思う。
満足 △ timeの使い方本当に感じる。だけど、先生の時間ののびる方法はいいと思う。	コミュニケーション △ 単語。じじをあげるのはちょっとわかりにくい。… じじはフィリピン語で。	学生中心 ✓ ペアワークがいいと思う。

発表さいこうです～

コメント：前のデモレッスンにもつながってよかったと思う。確認もいいと思う。「ちゃいろ」と「cha（フィリピン語のお茶）」の数え方はおもしろくて、覚えやすいと思う。先生のペア発表のコメント、及び他のコメントは日本語でしたらもっと学生に日本語のひょうげん（例えは「いいですね！」とか、「すばらしいです」）を聞かせたほうがいいと思う。

〔資料３〕研修修了時の感想シート（抜粋部分「自分の今までの教え方とまるごとの教え方との違い」）

Activities	my usual way	MARUGOTO way
☆Discussion of the vocabulary before the lesson proper itself	○	×
☆Making the students guess the meaning of words/ phrases/ sentences based on the picture	× (I usually give the students hints or situation where they are used)	○
☆Abundant discussion of culture	Sometimes	○
☆Used of CD for language exposure	○ (I usually play the CD for vocabulary introduction and listening comprehension (as summary of the lesson))	○ (Plays CD to provide language input and sometimes for listening tasks)
☆Pattern drills	○	×
☆Grammar explanation	○	×
☆Output activities	○ (My output activity varies from oral to written depending on time constraint.It usually includes task that must use the patterns and vocabularies learned in the lesson.)	○ (definitely involves interaction with co–learners and used of the language in real – life situations)
☆Correction of errors	○ (I tend to identify students' error and address it in class, explaining what error was committed and how to correct it)	× (Teacher tend not to address the grammatical errors committed by students and provide explanation differentiating the error from the correct form.)
☆Student's participation	○ (Students participate and use the language within their means– what was retained in their memory, what they have studied (patterns, vocabularies).I usually address a question to the class and then nominate one student to answer said question.)	○ (Students seem more relax and free to share their ideas and thoughts with the members of the class.Since the atmosphere is nonthreatening, they have more confidence to speak out their mind and answer questions.)
☆Student's reflection	×	○ (students are asked to check their can–do list at the end of each lesson making them think of what they have and have not accomplished of the day)